

# 最後の日

イエスは、地上での人生が終わりに近づいていることを知っていました。地上で果たすべきことはほぼ完了し、間もなく裏切られて処刑されるとわかっていたのです。では、最後の24時間を、イエスはどのように生きたのでしょうか。



**イエスは謙虚でした。**弟子たちと食事を共にするための時間を設けたのですが、まず、一人ひとりの足を洗って、彼らを温かく迎えました。足を洗うことは、大抵の場合、最も身分の低いしもべの仕事でした。当時の人々は、ほこりっぽくぬかるんだ道をサンダルで歩き回っていたので、ほとんどの人の足はかなり汚れていたのです。そういう状況で、イエスはかがんで弟子たちの足を洗うことによって、彼らに大きな愛と謙虚さを示しました。自ら彼らのしもべとなったのです。（ヨハネ13:5）



**イエスは父に委ねており、従順でした。**拷問と死を味わうという見通しに直面し、それはとてもつらいことだったので、汗が血の滴りのように地面に落ちるほど、必死に祈りました。それでも、天の父は最善をご存知であると信じ、「わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」と言ったのです。（ルカ22:41-44）

**イエスは無条件の愛を示しました。**裏切りにあっても、仕返しはしませんでした。虐待されても、腹を立てませんでした。最も親しかった者たちから背を向けられても、怒りを返すことはしませんでした。不当に訴えられ、屈辱を受けても、それに対して口をつぐんだままでした。（ルカ22:45-71）



**イエスは正直でした。**まずサンヘドリン（ユダヤの最高法院）、それからピラトという、裁判官たちの前に連れてこられました。彼らから率直に「あなたは神の子か」と質問された時、真実を告げないでおけば、イエスは多くの苦痛と苦悩を免れることができたでしょう。しかし、どんな代価がかかろうと、真実を曲げなかったのです。（ルカ22:66-71, 23:1-3）



**イエスはゆるしに満ちていました。** 鞭打たれ、笑いものにされ、つばを吐かれ、十字架にかけられる場所まで通りを引きずり回された後でも、「父よ、彼らをおゆるしください」と言ったのです。自分を拷問する者たちの上に炎と稲妻を呼び下ろし、神の子を苦しめたからと言って彼らを呪うこともできたというのに、そうやって自分を笑い者にし、侮辱してきた相手をゆるしました。（ルカ23:34）



**イエスは利他的でした。** 十字架につけられて激しい苦痛の中にあっても、自分の母親がちゃんと世話されるよう取り計らいました。また、自分の横で死にかけている強盗に耳を傾け、元気づけました。自分のことや苦痛についてよりも、他の人たちのことや、彼らの幸せについて考えていたのです。（ルカ23:39-43; ヨハネ19:25-27）

イエスの人生最後の日の生き方は、それまでの全生涯の生き方となんら変わりありません。その日、イエスはそれまでのどの日とも同じように、愛し、与え、ゆるし、父の愛を他の人々と分かち合う機会を見つけていました。



[www.freekidstories.org](http://www.freekidstories.org)

Images by Gospelimages.com  
Text adapted from Activated magazine